

増山麗奈の 農はアートだ!!

絵・写真=増山麗奈



第16回

おおい町で原発再稼働について聞いてみた

野田（私はあいつを首相と認めない）が6月8日、大飯原発3、4号機再稼働容認の記者会見をして、おおい町長も、福井県知事もそれに同意した。官邸前には4000人が抗議に集まった（ちなみに国はその官邸前道路をこれから6ヶ月間、1億5千万を投じて工事する。つまりデモ封じをするらしい）。

政府が自分達を殺す為の組織だと、人々は気づき始めた。もしこの2基を止められたら、日本は原子力から脱皮する一歩を踏み出せる。国際社会にもインパクトを与えるだろう。

日本、いや今後の世界のエネルギー状況を左右する大飯原発の再稼働問題であるが、地元ではどのような反応がおきているのだろうか。例えばそこで農家を営む人は、何を考えているのか。

自然災害や鉱害に 悩まされた歴史

6月、おおい町を訪ねた。再稼働問題の「台風の日」とは思われないほどにゆったりと美しい田舎町だ。人口8492人。2006年3月3日に遠敷郡名田庄村と大飯郡大飯町が合併して、おおい町となった。かつて京都が首都だった時は、周山街道で繋がれ、魚や



おおい町の農家は主婦と兼業する女性が多い

銅、塩などを都に運ぶ産地地区として栄えていた。しかし自然災害や鉱害の歴史も刻まれている。

1586年1月18日、日本中部で発生した巨大地震により、大きな津波が若狭湾を襲った。広瀬隆氏は「三陸沖や若狭湾のようなリアス式海岸は、津波が多いとよく言うが、それは反対。津波が続く、土をえぐりあのようなジグザグな地形をつくったのだ」と怖い事を言っていた。また水害が多い土地で、昭和28年に台風13号の被害を受け、壊滅的なダメージを喰らった。

野尻銅山は、宝暦10年（1760年）より藩から命じられ銅の生産をしていたが、煙害および悪水に

より田畑に多大の被害をもたらしたため、明和8年（1771年）5月に休山となった。文献によれば休山後も、鉱害が続いていたという。

そうした町に原発が誘致されたのは1978年。それからずっと町は原発と共に歩んできた。「私たちがこどもの頃、産まれた頃から原発はありましたから、それが悪いとか悪くないとか、考えたこともありませんでした」（40代・おおい町在住女性）。

町の中で誰に原発再稼働について聞いても、「立场上」などと前置きをした後「どちらとも言えない」とするっと逃げられる。この町ではスタンスを明らかにしない事が処世術なのだろうか。とはいえ、「フクシマを考えると不安ではある」と言う声もちらほら。

地元産を使って 丁寧手作りした特産品

現在のおおい町は、丁寧に管理された稲田が着物の紺のような黄緑の点を大地に刻む。休耕地は余り見られない。町役場に行くと状況を見てみると、おおい町では家庭につき一つの田んぼを持っているようで、基本的に専業農家ではなくほとんどが兼業農家。

町で特産物を売る「ぼーたる」の店員さんに聞いてみると「運転

停止が続いて、町の景気は悪いですね。民宿も干上がっているし、車の数も減りました。なぜか荷物を運ぶようなトラックは増えているんですけどね。人気の特産品は、梅やシイタケ、鯖に塩をふっつてぬか漬けにした「へしこ」です」。

特産品のいくつかを購入して味見してみた。梅や味噌など、手作りだとわかる微生物が生きた家庭の味。福井県産にこだわった味噌は、「米も大豆も麴も福井県産」と書いている。

最近は大企業ほど偽造をやるから、小規模生産はむしろ好感が持てる。地元から丁寧な文化や食を発信していく作業が結果として土地を豊かにすると思う。

交付金不正受給で

つくられたリゾート地

兵庫県から若狭湾に続く舞鶴若狭自動車道は、2010年から2011年6月まで本州内で一番長い高速道路無料化社会実験が行われていた。その影響もあり、この期間の観光客はかなり増えていたそうだ。

ふと思った。若狭湾に雇用をつくりながら脱原発を目指すなら、もう一度高速道路を無料にして観光地としてのポテンシャルを上げていけばいいのに。例えば海一つとっても、太平洋側より日本海側

がより安全だろうし、サーフィン、海水浴なども可能性がある。かなりの人口が震災以後関西や福井に避難しているだろうし、関東からも保養地として人気が出るんじゃないのか。

しかし残念ながら、年間80万人ほどの観光客が訪れるおおい町の今までのリゾート計画は原発マネーに汚れたものだ。原発のある大島地区にある海水浴場に隣接してつくられたリゾートホテル「うみんびあ大飯」。ここが工事費の一部を国に虚偽請求して立地自治体への特別交付金25億円を受給したことが昨年報道された。本来なら詐欺罪になるはずだが、相手が地方自治体ということで刑事告発すらされていない。

いま再稼働を許す事はその責任追及もされぬまま、同じような利権を犯罪者達に与える事になるのではないか。

農業だけでは食べていけないから原発へ

取材中、私が土産物屋で買った梅を作っている「うめつぼ」の経営者、古池洋子さんと偶然出会った。取材先に向かおうとする私を、軽トラに乗せて送ってくれた。気さくであったかいおばちゃんである。

「中国から安い梅が入ってきて、青梅の値段が下落した。青梅だけじゃ利益が出ないので、加工して販売しようと、生産組合の有志が集まって出資金を出して、県の補助金ももらって4年前に、女性達14人が集まって『うめつぼ』を始めました。おおい町の梅ブランドをつくりたい。でも梅だけじゃ暮らすほどの収入にならない。だから主人は原発に勤めているし、弟もです。今すぐ再稼働を全部止めるといふ事になると正直我が家は困るけれど、いずれにしてもだんだん減らしていかなきゃかんとは思う」と古池さんは語ってくれた。

ここ「おおい」では、パトロンとしての関電がいたからこそ、経済主義に走りすぎずに、農業の知恵が残っているという点もあるんだなと気がついた。

関電社員は給料が高いので、多くの社員はおおい町の娘と結婚して、親族全体を養っているケースが多い。それが村中に仕掛けられた原発の包囲網となってるわけだ。

NONNUKEだからと取材拒否

古池さんのご紹介で、「へしこ」の粉を混ぜたポテトチップスを販売する第3セクター「株式会社おおい」の担当者木村氏を訪ねた。



原発マネー公園の真ん中に、「再稼働ゼッタイ反対」オキユバ

第3セクターとは、行政が民間と協力して商品を作り出すなど官半民の組織。立派な体育館や図書館、美術館が立ち並ぶ一角に事務所を設けている。筆者が名刺と本誌を渡すとその場で「あ、これって、原発側ですね」と一瞬にして取材は終了。筆者もActioもレッドカードだったらしいw。帰り道原発マネーで建てられた立派な運動公園を歩いていると、再稼働反対の看板を掲げ、オキユバイ活動を5月22日から続けている白井氏と出会った。前日は福井県庁の前に行ったとのこと。警察に妨害を受けたと腕に生々しく残るあざを見せてくれた。ここは戦場である。

【増山麗奈】画家。二児の母。東京芸術大学を中退。2003年、イラク開戦時に反戦アート集団「桃色ゲリラ」を結成、代表を務める。芸術界にとどまらず、反戦パフォーマンス、執筆活動、絵画活動など多ジャンルで精力的に活動。2010年、増山を題材にしたドキュメンタリー映画『桃色のジャンヌ・ダルク』（鶴飼邦彦監督）が公開。公式HP <http://www.renaart.com/>